

18 世紀に出版された『シンデレラ』の チャップブック —その伝統と工夫

木 村 利 夫

1790 年から 1800 年頃の『シンデレラ』のチャップブック⁽¹⁾

『シンデレラ』のチャップブックで 18 世紀に出版されたものは極端に少ない。19 世紀の初頭にチャップブックはその出版の全盛をむかえることになるが、1800 年を境にそれ以前とそれ以降では数の上でも質の上でも大きな違いが見られる。本稿ではロンドンの Holborn の Shoe-lane で出版されたチャップブック（以下、Holborn のチャップブックと記載する）を取り上げる。これは 18 世紀に出版された数少ない『シンデレラ』のチャップブックのひとつである。現存する 18 世紀のチャップブックは数点のみであるため、非常に貴重な資料と言える。オックスフォード大学のボードリアン図書館収蔵のチャップブックである。

本稿では、Holborn のチャップブックについて 1729 年の Robert Samber が翻訳した『ペロー童話集』の版と本学図書館所蔵の 1760 年から 1790 年頃の出版とされるチャップブック⁽²⁾を参考にしながら、その特徴を眺め、18 世紀の『シンデレラ』のチャップブックについて考察を加えたい。

サイズなど

サイズは、他の別の作品と合本になっているために正確な大きさはわからないが、おおよそ 17cm × 9cm で、1760 年から 1790 年頃のチャップブックとほぼ同じ大きさである。1 ページに 26 行印刷されるスタイルであり、後者の 37 行と比べると活字は大きく見やすいものである。

タイトルと出版事項、その他

「シンデレラ」の表記は、今日では Cinderella という綴りが一般的であるが、1729年の Robert Samber の版では、一文字異なる Cinderilla が使われている。『シンデレラ』のチャップブックは様々な版が出版されたが、ほとんどは前者の Cinderella の綴りが用いられている。Samber 版と同じ Cinderilla の綴りを用いているものは 1820 年頃に韻文と散文の形式で幾つかの異なる版を出版した J. Kendrew に見られるくらいで、それは例外的である。しかし、本稿で取り上げる版は、1800 年を超える前の 1700 年代の作品にあたるものであるため、Samber 版を踏襲しているのではないかと思われたが、今日広く使われている Cinderella の綴りが使用されている。1764 年にフランス語と英語を併用した『ペロー童話集』が出版されているが、その際には Samber 版と同じ Cinderilla が使われている。また、1760 年から 1790 年頃に出版されたチャップブックは Cinderella の綴りが使われている。さらに、1790 年頃に出版されたチャップブックは Cinderilla が使われており、⁽²⁾ カナダのトロントにあるオズボーン・コレクションに所蔵されている 1793 年出版のチャップブックは Cinderilla が使われている。さらにアメリカのリッチフィールドで、T. Collier により 1800 年頃に出版されたチャップブックでも Cinderilla が使われている。こうしたことから、現在流布している Cinderella の綴りは 1760 年前後から使われるようになり、1800 年頃までは二つの表記が混在していたことが理解される。

Holborn のチャップブックのタイトルページにある正確な書名は以下のように、すべてが大文字の表記となっている。

THE
HISTORY
OF
CINDERELLA;
OR, THE LITTLE
GLASS SLIPPER.

これらは 6 行に分けられて中央揃えでの配列がなされている。そのうち CINDERELLA, HISTORY, GLASSSLIPPER は大きいサイズの文字となっているが、それぞれ微妙に大きさと太さに変化がつけられている。残りの小さい文字についても大きさにわずかな変化が見られるので、工夫を凝らしていることがうかがえる。セミコロン以下の副題を含めた書名はよく見られるものである。副題にある定冠詞はしばしば不定冠詞になる版もあるが、どちらも特に変わった表記というものではない。

出版事項に関しては、次のように 3 行に分けられて記載されている。

L O N D O N:

Printed and Sold at the London and Middlesex Print

ing Office, No. 81, Shoe-lane, Holborn.

ここには出版者を示す氏名などは見当たらない。Shoe-lane はロンドン市内にある道路の地名で、Charterhouse と Fleet Street とを結ぶ通りである。特に Fleet Street は 16 世紀の初めから「印刷の街」として知られている通りである。したがって、このチャップブックは出版業界の老舗の地域で出版された伝統を背負うチャップブックということになる。

その他に、タイトルページに関して特筆すべき点は、長形の s を用いていることである。現代の表記では Middlesex となるところであるが、この版では次のように Middlefex という表記になっている。この長形の s はやはり本編の物語の中でも一貫して使われている。この長形の s は一般に出版界では 1800 年を境に使われないようになるが、チャップブックの世界も同様で、1729 年の Samber 版や 1760 年から 1790 年頃の出版のチャップブックでは使われているが、1800 年以降ではほとんど使われることがない。極まれに、わざわざ長形の S を使用する版もあるが、一種の懐古趣味という感が否めない。

挿絵について その1

『シンデレラ』のチャップブックの場合、例外はあるものの、タイトルページには挿絵はなく、物語の本編中に複数枚の挿絵が存在するのがほとんどである。しかし、この版には1枚しか存在しない。しかも、タイトルページの見出しと出版事項の間に挟まれた位置に置かれているので、本編には1枚も存在しないことになる。このスタイルは『シンデレラ』のチャップブックではきわめて珍しいものである。チャップブックの人気の衰えてきた1850年頃を過ぎると同じようなものが出現するが、その場合は出版費用を節約することを主な目的としたものであろうと考えられる。Holbornの版は経費削減をもくろむというような意図的なものではなく、1729年のRobert Samberの版にある挿絵が1枚であったことに起因することが主な理由ではないかと思われる。いわば自家のスタイルを忠実に守った伝統的な形式を踏襲したにすぎないのではないかと考えられる。

挿絵について その2

1760年から1790年頃のチャップブックとの関連

挿絵の出来栄はSamber版とはまったく異なるもので、Holbornの版の挿絵は木版による素朴な図版である。その構図は実は1760年から1790年頃に出版されたチャップブックとほぼ同様のものである。登場人物の人数、配置、姿勢(ポーズ)などは酷似している。異なる版木を使っているので、まったく別の作品となる挿絵ではあるが、シンデレラのドレスの襜の具合や王子が左手で靴を拾おうとして腰をかかめながらも顔を正面にむける特徴的な姿勢などはまったく変わらない。顔の描写は、どちらも白地の顔面に眼、鼻、口が「点」だけで描写されている実に素朴な印象を与えるものである。Holbornの版は眼、鼻、口の「点」がはっきりしていないこと、体と顔のバランスが悪く顔が大きいものがあること、また一部を除いては髪の毛がほとんど描かれていないことなどが大きく異なる点である。シンデレラが逃げながらも後ろを気にかけている

姿勢を取っている点はどちらも1729年のSamber版に見られるモチーフをそのままに踏襲しているもので注目すべき点である。

また、上述したように挿絵は1枚しか存在しないが、1760年から1790年頃のチャップブックには14枚（その他に、物語の本編の最終ページには、余白を埋めるカットが置かれている）あり、シンデレラが逃げる場面の挿絵も物語の筋の途中に置かれているものである。本稿では後者の1760年から1790年頃の版の挿絵をご覧ください。



(鶴見大学図書館所蔵 p.13.)

中央部分に上下の斜めに白線が入っているように見える線が見られるが、これは紙葉に襞があり、そのままに印刷をしてしまったために出来た白線である。Holbornの版の挿絵は枠を四角に囲い、全体を小さくしているものである。

本編について 表現と形態

物語の内容は1729年のSamber版と同じであり、1800年代のチャップブックによく見られるような粗筋の改作や変更はない。同じ内容ではあるが言い方を変えて表現したり、単語が書き換えられていたりという程度のものである。しかし、その変更の根底にあるものは、分量をあ

る程度減じること、より劇的な表現をとることで物語に彩りを添えることである。具体的には、said を cried や replied にしたり、Go into the garden を Go again into the garden と変えたりと読者が物語を読み進めるに役立つ工夫を意図的に凝らしていることが理解できる。

形態の上での最大の特徴は、Samber 版には見られない改行が頻繁に行われていることである。Samber 版での改行は 11 か所に過ぎないが、この版では 42 か所ほどにのぼる。ページの変わり目と改行に相当する部分が一致している箇所があるので、実際にはもう少し多くなると思われる。こうした改行の増加は、読者の存在を考えての「読みやすさ」への配慮から来るものであろう。空白の部分が多い方が、圧迫感が少なく格段に読みやすいものとなる。1760 年から 1790 年頃のチャップブックの改行も 42 か所ほどになり、実は改行された場所はまったく同じ個所になっている。ただし、この版では、改行した部分に行間の空白を置けないところが数か所見られるので、多少の圧迫感が残るように思われる。これは紙面の印刷の都合によるものであろう。

表現に関しては、これらの 2 つの版はまったく同じというものではないが、どちらも Samber 版を範としているために大きな違いは見られない。

もうひとつの形態上の特徴は、各ページの最終行にキャッチワードと呼ばれる「つなぎ言葉」が見られる点である。Samber 版にも置かれているが、1760 年から 1790 年頃の版には見られない。1800 年代のチャップブックの中にはこのキャッチワードを印刷しているものがあるが例外的で、この書籍の形態の伝統を備えたものはチャップブックには珍しいものである。

教訓 その他

『シンデレラ』は本来、教訓が付随している物語であるが、やはり Holborn のチャップブックには教訓は見当たらない。チャップブックに教訓が付属しているものはないので、チャップブックとしての面目躍如

たるところである。中には教訓の内容を捉えた詩行などが添えられることもあるが、この版には教訓らしいものは一切存在しない。教訓が置かれるはずの場所には、空白を埋めるためのカットが見られるだけである。また、このチャップブックには引き続きもう一つ別の物語が印刷されている。1760年から1790年頃のチャップブックと同様であるが、*The Milk-Maid* という作品である。どちらもその作品を含めて24ページからなるチャップブックが出来上がるというスタイルである。

注目すべきは、どちらの版のチャップブックも *The Milk-Maid* の作品のあとには MORAL. と題して、13、14行の詩行からなる教訓が存在している点である。こちらも昔物語の伝統がかりうじて残された格好になっている。

まとめ

本稿で扱う Holborn のチャップブックは、挿絵が1枚、それも同じ画面の挿絵、長形の s、キャッチワードというように Robert Samber の版が有する特徴を兼ね備えた立派な「書物」となっている。しかし、決して同じものではなく、チャップブックらしさを十分に満たし、存分に発揮しているものである。時間をかけて校正をしなかったのであろうか、所々にミスプリントも見られることから急ぎ印刷し、安価で物語を提供しようとした姿勢が感じられるものである。しかし、Samber 版にはない工夫も凝らされており、1800年以前においても読者を意識した配慮も見られるなど24枚という小さな体のチャップブックながらも見応えのある作品に仕上がっていると言える。

注

- (1) 本稿で扱う Holborn のチャップブックはオックスフォード大学のボードリアン図書館所蔵になるものである。
- (2) この1760年から1790年頃の出版になるチャップブックの他にもは本学図書館所蔵のもので18世紀に出版されたチャップブックがもう1冊ある。そ

の作品について、拙書の『「書物」としてのチャップブックについて－1790年頃に出版された『シンデレラ』のチャップブックを中心に』（鶴見大学紀要第36号第2部）を参照されたい。